

幼児の造形あそびにおける版表現への気づきと現れについて

城山萌々 幼児教育科
鎌田望 附属たかだま幼稚園
齋野真利奈 附属たかだま幼稚園

(2021年10月1日受理)

〔要約〕

日本における版画制作の歴史と表現の変遷を概観した上で、版画が限定的な技法を用いた作品制作から版そのものの概念をもとに表現する「版表現」へとシフトし、それらの変化が学校教育に及ぼした影響について先行研究をもとに示した。今日では、「版表現」が教育現場においては初等教育だけでなく幼児の造形あそびや技法あそびにも多く導入されていることを踏まえ、幼児期の版表現の楽しみや気づきについて考察する。附属幼稚園でのローラー遊びの実践とその記録、及びその後の普段の活動でのドキュメンテーションから、「うつるーうつす」ことへ気づきや好奇心が段階的に現れ、直接的な表現とも関連しながら変化していく様子が分かった。

I. はじめに

日本で版画というと、多くは浮世絵や小学校での木版画制作が思い浮かぶ。紙版画なども、小学校のとりわけ低学年、あるいは幼稚園や保育園ですでに制作体験をしている場合もあるだろう。刃物の扱いへの配慮やインクで汚れることを忌避するような昨今の事情から現場での導入が難しくなっているとはいえ、版画制作は今なお美術教育のなかで欠かせない内容となっている。版画は美術作品としても制作体験としても非常に親しみ深いものであるといえるだろう。

小学校での版画制作が版画の技法を用いて作品を作り上げることや、版画の複数性を活用した集団制作を目的としている一方で、幼稚園や保育園などで取り入れられる版画制作は「版画あそび」「技法あそび」といったような、版を用いて作品を作るよりも「うつるーうつす」という関係性を楽しむことに重きが置かれている。これは幼児期における造形体験や活動のねらいや目的が作品中心主義からプロセス重視へと移り変わっていくにあたり、版画も作品制作よりもその過程や仕組みを楽しむことが注目され、技法を用いた「あそび」へとシフトしていったと考える。

このような教育現場での変化は、美術作品としての版画やその制作が「版画」から「版表現」への変遷を通過したことと無関係ではないだろう。そして、子どもが直接描くこととは異なる体験である「うつるーうつす」の関係を体得してその造形を楽しむためには心身の発達や個々の体験、知的興味や関心なども深く

関係すると考えられる。

本稿は、日本における版画制作の歴史と表現の変遷を踏まえ、子どもの技法あそびの設定と観察をもとに、「うつるーうつす」ことの気づきや版表現の楽しみについて考察するものである。

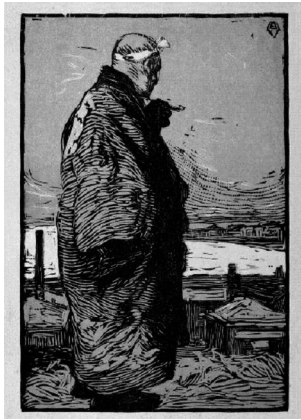
II. 研究の背景

本研究の背景として、日本において版画制作がどのように行われ、その表現とともにどう変遷してきたか、そしてそれが美術教育・造形教育でどのように発展してきたかという部分に触れておきたい。

日本の版画といえはまず浮世絵が想起されるだろう。浮世絵が陶磁器の梱包材として海を渡り、西欧の芸術に大きな影響を与えたことは言うまでもない。毛筆による単純化された線画と色面をもとにした表現や多版多色刷りの鮮やかさはハーフ・トーンによる陰影表現を基礎としていた西洋の美術界を揺るがすものであった。このような豊かにして高度な木版画文化の中に、銅版画・石版画・孔版画の文化と技術が幕末から明治にかけて一気に流入する。また、これと同じくして「芸術」や「美術」の概念も日本に輸入されるのである。

愛好の対象としての版画と印刷文化の賜物としての刷りものが混在する中で、芸術としての版画制作への宣言となったのが大正期の創作版画運動である。創作版画運動は山本鼎(1882-1946)が提唱し、「自画・自刻・自刷り」をスローガンとして作家自らが版に向

かうことで、複製を目的とした刷りものと一線を画す「創作版画」の制作を目指した。^(図1)そしてこれは版画家たちの地道な活動により広く普及し日本における版を用いた作品制作の礎となった。

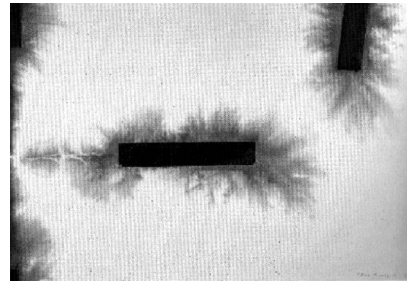


〈図1〉
山本鼎《漁夫》
22.1 × 17.3cm
1904年

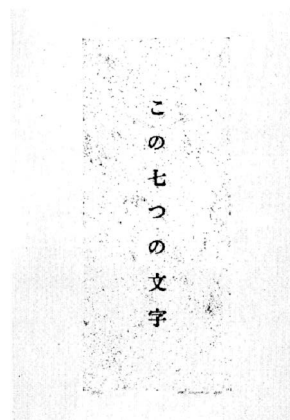
第二次世界大戦後には、日本が芸術においても積極的に国際交流を図ろうとする気運の中で、当時の二大国際美術展において洋画家や日本画家をおさえて版画家たちが次々と受賞をした。これは、豊かな浮世絵文化の土壌があり、そこへ創作版画運動が育んできた日本の版画表現が特出したものであると国際的にも受け止められたことを示しているといえるだろう。^{註1}

1960年代頃には、海に向こうからのポップ・アートのムーブメントによる影響もあり、^{註2}日本でも版画制作は版画家以外の者にも広がり、版画の表現に様々な要素や可能性が見いだされていくようになった。そして、東京国際版画ビエンナーレ^{註3}の開催とそこで発表された作品たちにより、「版画」の概念や定義を問われ、「版画」たり得るための外郭が拡張されていき、どこまでを版画とするべきか、版による表現とは何かという問いかけがなされた。それは「版」の解釈とも深くかかわっており、それらの問題提起や考察は作品を通して行われていった。^{註4}そして当時、この問いかけに対しての明確な解答や結着づくことがあったとは言い難く、^{註5}東京国際版画ビエンナーレの出品要項の規定の変遷や、また、日本版画協会の公募展の規定などからその時々の「版画」を定義付けることはできたとしても、それに当てはまらない作品表現も出てくる。創作版画運動期の版画表現が木版を中心に、銅版、石版、孔版を用いて行われ、それらの技法を用いた特徴的な作品表現が主であったことに対し、1970年代以降の作品は、何を「版」とするかという選択や解釈と、それによって得られること自体が表現として広がっていった。このような状況から、「版画」から「版表現」へと意識が変化していったのである。こ

れは、版の材料や形式にとらわれず、「うつるーうつす」という潜在的な仕組みを用いて表現をする姿勢ともいえよう。^{(図2) (図3)}



〈図2〉
河口龍夫
《関係一痕跡》
74.6 × 118.5cm
1989年



〈図3〉
高松次郎
《日本語の文字
(この七つの文字)》
61.2 × 25.4cm
1970年

日本で芸術としての版画が紆余曲折を経ながら多様な表現を獲得してきた経緯を概観した。それを踏まえて、美術教育や造形教育の中での版画はどのように発展してきたのかという所に触れていきたい。

版画が日本の美術教育の中で導入された経緯や内容については、今井治夫「我国の版画教育について」（金沢大学教育学部紀要・教育科学編、第36号、1987年、245～254頁）に詳しい。今井によれば、学校教育の中で版画が導入されたのは大正7年（1918年）以後である。創作版画運動の中心人物であった山本鼎らが1918年に日本創作版画協会を設立し、まずは版画を日本でも芸術の一分野として確立することを目指し、その活動の中で高等教育に版画分野を設置した。

山本鼎は日本の図画教育を臨画教育中心から自由画教育への変革を進めた人物でもある。今井は、この自由画教育普及の流れのなかに、版画の制作も盛り込まれていったとしている。^{註6}初等教育での版画制作は、図画教育改革の中で「自分が感じたものを表す」ための手法の一つとして導入され、展開していったのである。

一方で、前述のとおり、この時代の版画は芸術の一分野としての地位の獲得を悲願としていた。このような背景から、版画独自の表現についての認識はあるが

「版画も絵画である」として価値を説いており、直接的な技法である絵画と一線を画した表現として認識されるには至っていなかった。

戦後の学校教育では、今井の調査によると1951年の学習指導要領試案の中で「造形」という言葉が多く使われると共に描画材料にも版画が加わり、その後1955年以降の文部省検定教科書のなかにも版画の記述が増大していく。さらに、今井は戦後に日本の版画が国際的な評価を受けたことなどのほかに、版画教育の隆盛を進めたものとして「日本教育版画協会」の発足と活動を挙げている。^{註7}日本教育版画協会を中心に、全国規模で技法研究や授業研究、実技指導などが行われ、初等教育の段階で誰もが版画制作を経験するまでに普及したのである。

また、今井は子どもの版画表現について以下のような比較も行っている。

〈戦前〉

「筆を刀に持ちかえたような、勢いのある太い彫り跡が見られ、細部にこだわりがない。その点では生き生きとした表現となっている。しかし、子供の眼で見た、子供独自の表現が希薄である。(略) 子供が版木の抵抗感からさぐり当てた形といったものが十分伝わってこない」¹⁾

〈戦後〉

「子供の絵の一般的特徴は、平面的思考からなり、形は並列的な要素が強い。また、観念的な輪郭線で形を捉えようとする。(略) この並列的な思考と、輪郭線による形態把握の傾向を、子供の眼、子供の方法として木版やリノリウム版、ドライポイント版の中に活かしたものである。従って1つ1つの形は観念的であったり、小さな部分の羅列として表されていても、子供の心と結びつき生き生きとした充実が感じられる」²⁾

このように、日本では版画制作の広がりやその表現の変遷が美術教育とも繋がっており、相互に関わりを持ちながら発展してきた。

Ⅲ. 研究の目的

自由画教育から造形教育への流れとともに形成されてきた版画教育の形式は現代も脈々と受け継がれているが、一方で1950年代の頃には確立していた技法や表現からあまり変化していないと見ることもできる。現状では、初等教育の中での版画制作は一時期のような盛況は見られず、むしろ、安全性への配慮から刃物や有機溶剤を忌避せざるを得ない環境や、教員の教材研究に使える時間が減少する一方である状況では、木版画の制作などは導入しづらいものになってしまったの

であろう。その点では、21世紀の版画教育はスチレン版画などの新材料や、掃除のしやすさや環境に配慮した水性の版画インクなどが登場し、現場の負担を減らしながら造形活動ができるような手法が求められ、それに応えるような取組や研究を中心に発展しているといえよう。

戦後に版画から版表現へとその概念が拡大していったが、そういったものが初等教育の現場に明確に反映されているとは言い難い。むしろ、現代的な版表現は幼児教育や保育の現場での制作あそびに見ることができる。

幼児の制作あそびや技法あそびには版を用いたものが多くみられる。紙版画やスチレン版画、コラージュ版画などのいわゆる「版画」技法は、版画表現の流れを踏まえて見れば創作版画運動由来の伝統的な「版画」にカテゴライズされるものであり、「版表現」として版の概念を拡大してみるとそのほかにも様々な内容が見つかるだろう。例えば、スタンピングやローラー遊び、ステンシルやこすり出し（フロッタージュ）、などを挙げるができる。さらに、ビー玉転がしなどもビー玉の軌跡を版と捉えればその痕跡を写し取る、版による表現なのである。

しかし、版を用いて写すその行為やそれによってできた形を楽しむためには、身体的な発達や認知能力の発達も関わってくると考える。直接描くことによる絵画表現は描画材や行為と結果がダイレクトに繋がるので認識しやすい。手の動きや体の動きが描かれたものとして直に表れるためである。しかし版表現では、行為と現れるものの中に「版」を介在するため、因果関係が複雑になるのである。版になるモノ、それも必ずしも物体である必要はないような何かがあって、それを写すことと写ったもの、それを楽しむためには「うつる—うつす」ことへの気づきが重要になってくる。

このような版表現への気づきと楽しみへの発展は、幼児の活動の中でどのように現れるのであろうか。また、複雑なプロセスであるからこそ、「うつる—うつす」ことへの発見やそれによって得られる表現を楽しむことは、幼児の発達や成長にも大きく関わることだと考える。本研究では、幼児期の技法あそびにおいて版表現がどのように現れ、幼児の発達や成長とどのような関わりを持つのかを実践とその観察に基づいて考察し、幼児期の版表現活動への適切な支援方法を探るものである。

Ⅳ. 実践

1. ローラーを用いた造形あそびの実践

附属幼稚園連携事業の一環である〈たかだま造形あ

そび)において、ローラー遊びを実施した。

日時：2021年5月13日 10：40～11：40

場所：たかだま幼稚園遊戯室

対象：年長児 33名

保育者：6名(筆者、短大教員1名、幼稚園教諭2名、補助学生2名)

○用具・材料

- ・ハンドローラー(発泡ポリエチレン製) 人数分
- ・練り板 人数分
- ・絵の具(ポスターカラー) 6色
- ・画用紙 四つ切り 2～3枚/園児1名
- ・画用紙 ロール グループ活動用
- ・丸や三角、星形など様々な形に切った紙片
- ・新聞紙(養生用)

ローラーと練り板は園児1人につき1セット用意した。絵の具は版画用ではなくポスターカラーを使用し、基本色として赤・黄をあらかじめ練り板の上に用意し、3色目を園児に選んでもらうようにし、青・緑・黄緑・ピンクを配布する形で用意した。これは、3原色を用意すると色が混ざっていくうちに全員が同じような濃い茶色になっていくために、3色目に黄緑やピンクなど明度の高い色も忍ばせ、選んだ色によって多少の違いが出るようにしたものである。画用紙は各自での活動用に一人当たり2～3枚用意し、後半に大きな紙の上での活動に広げたいと考え、ロールの大きな紙を用意した。

○環境構成

感染症対策も踏まえ、一人一人がそれぞれ1つずつのローラーと練り板を使用できるように用具と材料を

配置した。(図4)あらかじめ新聞紙で床の養生をし、ローラーと練り板を置く。練り板には2色(赤・黄)の絵の具を出しておいた。個人での制作を中心に行い、ローラーの扱いなどに慣れた後、グループに分かれて大きな紙にローラーで絵の具をつける遊びに繋げる。そのため、後半は(図5)のように4か所に大きな紙(ロール紙)を拡げ、グループ毎に集まって制作するように配置する。

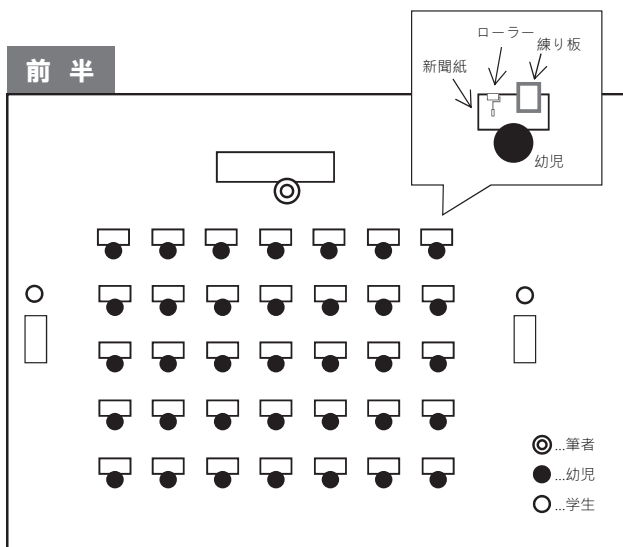
○活動のねらいと内容

幼児の表現活動のねらいとしては以下のように設定している。

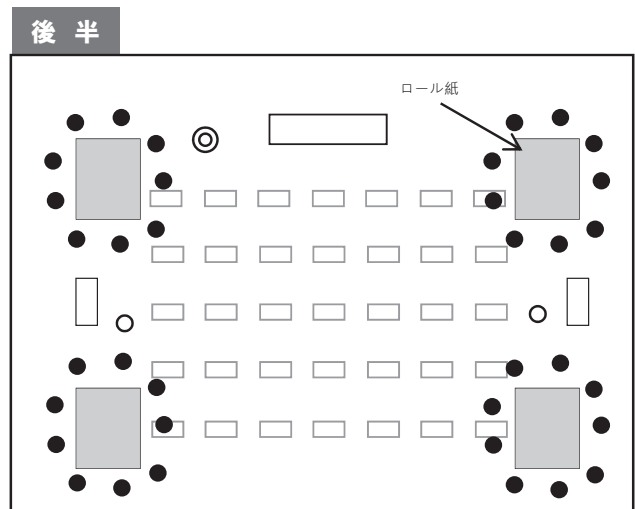
- ①ローラーの扱い方を知る
- ②ローラーを使うことで筆や指を使った絵の具あそびとは違った感覚や表現が得られることを楽しむ
- ③全身を使って画面に色や模様を展開することを楽しむ

今回の造形あそびでは、版表現への気づきがどのように得られるのかという点にも着目したい。ローラーそのものも版として捉えると、②のねらいのなかで出会う、筆とは異なるローラーの規則的な運動によって得られる模様や色の反復などの発見や興味がこれにあたるだろう。

活動の内容は、ローラーを使って絵の具を混ぜたりのばしたりし、それを紙に写すことと、対象者が年中児であることから紙に色や模様を付けるだけではなく、絵の具をつけたローラーに紙片を貼り付けてから紙の上に転がすことで紙片の形がうつるといった遊びを加え、最後にグループ毎に集まって大きな紙にローラーを転がして楽しむようにした。



(図4)



(図5)

○活動の流れ

まず初めにローラーあそびの説明を5分程度で行った。対象の幼児達はすでにスタンプ遊びやフィンガーペインティング等の絵の具に親しむ造形あそびを経験しており、また、通常制作活動で個人用の絵の具を使い始めたところであることから、絵の具あそびの一環であることと、ローラーというこれまで使ったことのない道具を使ってみることを中心に話をした。話をしながら、絵の具をつけていない状態でローラーに触れ、動かし方を確認した。

次に、絵の具についての説明を行った。練り板の上にある色のほか、自分でもう一色選んでそれを取りに行く手順を話し、誘導した。〈図7〉は練り板に絵の具を出している様子である。

全員が絵の具を受け取った後、ローラーに絵の具を付けて転がすよう声をかける。練り板の上での動きに慣れた頃合いを見て、紙の上で転がすように伝える。色が混ざっていく様子や紙に写したときにできる模様などにも注目してもらいたいため、5～6分ほど思い思いに活動できるよう時間をとった。〈図8〉この間に、

様々な形に切った紙片を配布する。今回はハサミの練習で幼児たちが切ったものを流用している。

紙片を使って模様を付けるやり方を説明する。幼児の前で実演をしながら説明したのち、巡視と声かけをしながら個別に対応する。絵の具の量やローラーの扱いによっては、ローラーに紙片が貼りつかない・画用紙に紙片の形が写らないなどの状況が予想される。また、〈ローラーに絵具を巻き付ける〉→〈紙片をローラーにつける〉という手順を違えれば練り板の方へ紙片が付いてしまい、紙に模様が写ることはない。きれいに形を写すことを目的とするなら、練り板の数を限定し、保育者が絵の具の量やローラーの扱いを適宜調整しながら行う方法が好ましいが、今回は幼児が主体となる活動であることと感染症対策を考えて、練り板を各自に一つとして個別に対応していく方法を取った。この時、絵の具が足りなくなった幼児には使いたい色を聞いて補充するようにした。

紙片を使ってのローラー遊びの後、大きな紙を使ったグループ活動へ誘導する。4か所にロール紙を設置し、担任からグループごとに場所を指示して移動する。



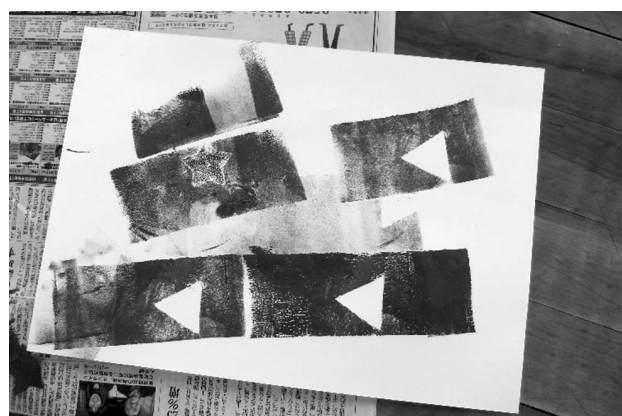
〈図6〉



〈図7〉



〈図8〉



〈図9〉

幼児が互いに声を掛け合いながら活動が展開するよう援助する。

活動終了後、絵の具との触れ合いやローラーの感触などを振り返る。

○活動の記録と展開

今回の造形あそびでは、写真での記録のほか音声記録を取った。ローラーで練り板に絵の具を拡げて紙に写す段階では、

「混ぜていいの？」

「何色になるんだろう」

「いろんな色付けた！」

「これとこれとこれ混ぜてみる」

など色彩への興味が広がっている発言や様子が伺えた。ローラーを動かすうちに模様ができたり色が混ざったりする中で、

「青に合体しちゃった！」

「3色混ぜた」

「黄色と青が負けてるわー」

「オムレツみたいだ」

といった、ローラーでの混色の面白さを楽しむ姿が見られた。また、周囲の様子を見ながら遊びに取り組む幼児もおり、

幼児A：「ねー、オレは茶色だよこれ！」

幼児B：「これもいい色じゃん」

幼児C：「これはこうやっちゃったー」

といった会話も見られた。

紙片を貼って模様を付ける段階では、模様が付くことへの関心の度合いに個人差が見られた。

「ついた！」

「あ！ねえ見てこれ！なんかハートの形になってる
～、ほら！もうちょっと！ほらほら」

「先生見てー四角になった！」

「じゃあ、もう一回ハート貼りまーす」

「もっと貼っていいの？」

「じゃあこっち、おー今度は青色のハートになるかな？なれなれなれー」

「もう一回、貼ーろう！」

「ころがしてみる。わーきれいきれいー」

このような反応を見せた幼児は模様が付くことに高い関心を寄せたと思われる。

ローラーに紙片を貼って転がすことが思うようにできなかったとみられる幼児からは以下のような声が上がっていた。

「これ付けたのどっか行っちゃったー」

「全然なんない」

「先生～かたち付けたの無くなったー」

「一つしかできなない」

「紙取れちゃった！！」

「かたち付かない～」

また、次のように、思うようにいかなくても試行錯誤をしている様子が伺える姿もあった。

「お星さまどこだよ！星どこ行った～？多分どっか行ったわ」

「ここに紙もついてきてる」

「こっちはもう少しだな」

「これはがせる？」

「星のやつやる」

さらに、幼児同士で解決を試みる様子もあった。

幼児D：「これ付けるのー？」

幼児E：「こうやるんだよ」

幼児D：「ついたー！」

ローラーに絵の具を巻き付ける際に、前方への動きが強すぎて練り板が動いてしまっている状況では、台を押さえることが必要と考え、

「誰か～！つかんでくれ～！！」

と、周囲に手助けを求める姿もみられた。



〈図10〉



〈図11〉

グループに分かれて大きな紙にローラーを転がす際には、全身を使った活動にもなるためか「わー!」「おー!」「きゃー!」などの歓声を上げる姿や、「びゅーん」「どーん」など擬音や擬態の語を使っている姿が多く見られた。手元の画用紙での動きとの違いを感じている様子は次のような言葉から伺える。

「こんな遠くまで行けないよー」

「まだまだやるぞー」

「色がたくさん〜!」

「ここでずっと伸びないよ」

「進まない進まない」

さらに、協働して遊びが展開している様子も多く見られた。

幼児F:「ここについちゃった〜」

幼児G:「何やってくれる〜!」

幼児H:「もういいんじゃない?」

幼児I:「まだまだだよ!」

幼児H:「そだな!まだまだー!」

幼児I:「まっまだまだ使いたいよ」

幼児J:「ねーこれやってこれ」

幼児K:「やっちゃだめだよこれは」

幼児J:「だってこの色つまーんないし」

幼児L:「オレの色使っていいよ」

幼児M:「よし!よし!」

活動中と活動後に、手や指についた絵の具を気にする姿も見られたが、保育者や補助学生に向けて「手がやばい!」「ゾンビ〜!」などと言いながら絵の具だらけの手を出す様子から、抵抗感よりも「見て見て!」という気持ちや楽しさを感じている様子が伺え



〈図12〉

た。また、振り返りの際に担任から「絵の具が付いているのは楽しかった証だね!」という声かけもあり、充足感とともに活動を終えることができた。遊戯室を後にする際にも、あらためて自分たちが作った作品を見ながら笑顔で「またやりたーい」「これはオレ達の色だー!オレ達の色ー!」といった声が上がっていたことから本活動を楽しみ、達成感を得ることができた様子が見て取れた。

2. ローラーを用いた遊びや制作の展開

連携事業での「ころころ!ローラー遊び」を踏まえ、日々の活動や制作遊びの中でもローラーを導入することで、幼児の活動や表現にどのような変化や気づきがあるのか、附属園教諭(鎌田・齋野)が追跡調査を実施した。

〈図13〉および〈図14〉は、6月初旬の自由遊びにローラーを使うことを選択した幼児の様子と、6月中旬にお祭りのお神輿制作をした幼児がローラーを使った様子を観察し、ドキュメンテーションにまとめたものである。

〈図13〉は、6月2日の自由遊びの中でローラーを使ってみることを保育者が提案し、興味を持った幼児たちの活動を記録したものである。



RくんやYくんはローラーでの混色に興味を持ち、混ぜ合わせる行為を楽しんでいる。同様にMくんも自ら絵の具を持ってきて混ぜ合わせるなど混色を楽しんでいるが、最初の青色をローラーに巻き付けてすぐに「たのしい〜」と紙の方に転がして写している姿や「ひたすらコロコロ転がす」姿から、紙の上でできるローラーの跡を楽しんでいる様子が見られる。Tくんは絵の具を混ぜる・紙にローラーを転がすだけでなく自分の手にローラーで絵の具をつけ、紙に写している。手のひらの上にローラーを転がす感触を楽しんでいる姿が見られ、写した手形の修正をローラーで行うなどの工夫もしている。

〈図14〉は、お祭りごっこのお神輿の土台に絵の具で色を付けるためにローラーを使用した際の記録である。保育者からの「何を使って塗るか」という問いかけに幼児が「コロコロするやつ良いんじゃない?」と答え、ローラーでの色塗りに挑戦した。

Tちゃんはローラーが大きな面積を塗りやすいことを発見している。Oくんはペンキ屋さんのイメージが浮かんだようである。また、平らな面でない箇所の塗りにくさに気づき、筆を使用することを提案している。IちゃんとRちゃんと一緒にローラーを持って色を塗っており、「やりづらいくさなのしいね!」と、二人でローラーを動かすことにやりにくさを感じつつも

Rくん

「いろんな色をまぜるの
下のしい〜」

「んは色ができちゃ、ん〜」
「... ココロ...」
「... ココロ...」

⑤ 「大きい紙、どーぞ」
慎重に横にローラーを動かしてRくん

自分の絵の具も使って
色をまぜることも楽しんで。

6/2(水)
・ 洋服着がローラーを動かす
↓
・ Mくん 服を着ておぼめる
その後、お洋服が落ちる

〈絵具〉
白・赤・黄・青

⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

Mくん

「下のしい〜」




五月だろターター!!

「わ! 色〜!」

「自分でいい〜」

「まぜてお〜!!」

この間にか
自分の絵の具を持ってきて
直りだして!





「いい〜」

ひたすらコロコロまぜます。




「もうおぼる〜!!」 満足なローラーを動かしてMくん!

Yくん

自分の絵の具も混ぜ合わせる。

⑩ 「何にコロコロしたの?」
「いいの。色をまぜるだけだから...」
絵の具の量をまた増やして
下で混ぜ合わせ...

「紙、いる??」
「うん〜」

片手に紙を持つのが大変!!




Tくん

「赤・青もまぜちゃ〜!」

「手におぼるの気持ちいい〜!!」
コロコロローラーコロコロ




⑩ 「...笑」「おぼれた!」

「いい!」
「手型!」 「えい!」

「まん中が白いから、
ちんちん〜」





〈図13〉

一緒に作業を楽しんでいる。

これらの記録をもとに7月末に連携事業でのローラー遊びを振り返りながら筆者らで話をした中で、幼稚園教諭の方から、形を写すのは少し難しかったようだとの意見が出た。自由あそびの際に促しをしてみたものの反応が薄く、7月末の時点では、形を写す遊び自体はその後の発展が見られないとのことだった。形を写すことよりも絵の具そのものへの興味が強い様子で、ローラーならではの混色の楽しさや、筆との違い、特に混ぜ方の違いや少しずつ混ぜていく様子などに興味を持ち、楽しんでいるという。また、幼稚園教諭から、ローラーのタッチを使った絵画制作ができないだろうかという提案もあり、この機会に、紙片だけでなく紐を巻き込むやり方など様々な遊び方を紹介し、今後の活動でどのようなことができるか、様々なアイデアを出し合いながら検討した。

V. 結果と考察

今回の活動では、形を写しとることよりもローラーで色を混ぜることなどの方へ興味や活動が広がったが、このことから、版表現の間接的な仕組みと表現への気

づきが段階的に現れていくということが分かる。「うつるーうつす」ことを楽しむという点では、ローラーに絵の具をつけて転がすこと自体もまた、転移を繰り返してその軌跡を写す、版による遊びである。そこには形をうつすことよりも直接的な分かりやすさやシンプルな喜びがある。スタンプ遊びでも、低年齢であるほど写す行為や形を楽しむうちに、次第に絵の具の感触や色を混ぜることへ興味が移行していく。絵の具に触れることへの抵抗感を下げるための導入としてスタンプ遊びが勧められるのはこのためである。

版による遊びをしている中で絵の具の感触やそれに直接触れてみたいという欲求が現れ、また、その欲求が満たされるうちに色彩や混色のへの興味が現れる。そして、絵の具の感触や色彩への探求心が満たされると、再び形の転移や写すことへの新たな発見や好奇心が生まれる。このように段階的にフェーズの移行を繰り返すことで、幼児は表現する力を獲得し、より豊かに主体的なものになっていくと考えられる。

版表現による遊びが絵画表現のきっかけとなることや子どもの表現を主体的なものにすることは、版画の制作研究者である湊七雄が初等教育の図画工作での版画教材の研究のなかでも触れている。^{註8}

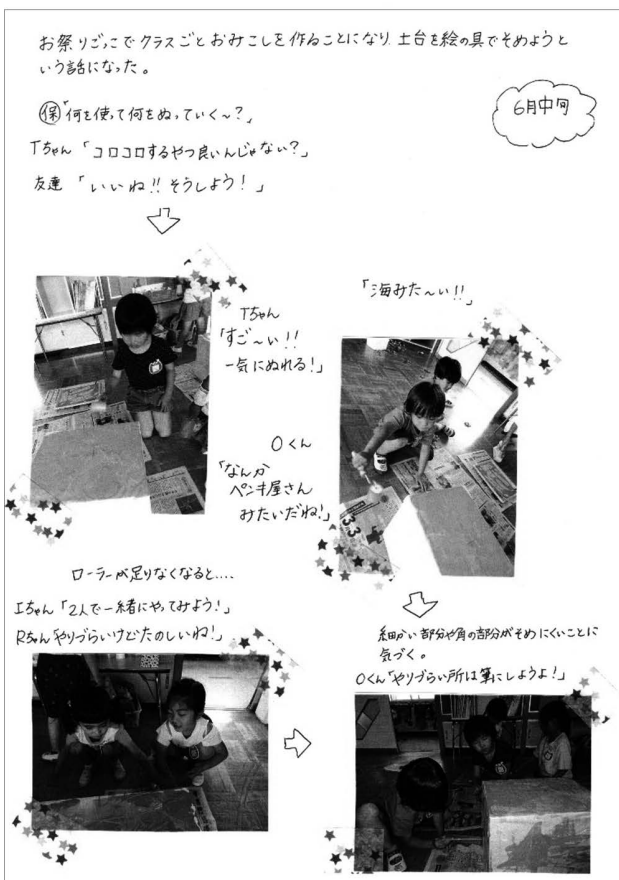
「様々なスタンプや版を擦し、表現を試行錯誤することで、児童自身が表現したいことを見つけ、主題生成につなげることができる。子どもが手で直接絵を描かなくても版を介することにより絵ができる。その絵は作者から適度に距離を保ち、手で描いた絵よりも客観的で見やすいのではないだろうか。」³⁾

湊は、版画の複数性が「刷り直しの効く」ものであり児童の試行錯誤の機会となることにも触れ、それが発想や構想を自ら練り自己決定する力の育成となっている。

幼児の表現においては「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことがねらいである。^{註9}「うつるーうつす」ことの楽しみや気づきは段階的に発展し、版の存在は幼児にとっても試行錯誤がしやすく、発達段階に応じて様々な発見や好奇心を引き出すきっかけとなる。幼児期における版表現も子どもの創造性を育むにあたって重要な機会を与えるものであるといえる。

VI. おわりに

本研究では、版による表現の変遷を辿ることで版画が版表現へと概念を拡大しており、従来のな作品制作だけでない技法あそびや様々な素材を版として用いた活動が、初等教育だけでなく幼児期の造形あそびにも



〔図14〕

多く用いられ、子どもの表現や創造性を拓げるものであることを考察してきた。

今回、文献とローラー遊びの実践をもとに考察を行ったが、実践の回数や追跡調査の期間を増やし、今後も継続的に実践と記録を行っていく必要があると考える。継続して行うことで、多様な幼児の活動の姿の記録をもとに、課題点の抽出やそれに基づいたより良い援助の方法などの考察やモデル化を進めていくことができると思う。

また、実践や活動の記録と分析方法についても改善と考案の必要があると考える。造形活動を研究するにあたり、活動自体の評価方法についても質的なアプローチを強化して取り入れていきたい。

註

註1 戦後の国際美術展における日本の版画家たちの活躍については小倉忠夫「戦後の日本版画史」に詳述されている（小倉忠夫／三木多聞編著『日本の現代版画』株式会社講談社、1981年、7～8頁）

註2 1960年代から70年代にかけて、ロバート・ラウシェンバーグやアンディ・ウォーホル、ジャスパール・ジョーンズなどがスクリーンプリントやリトグラフの技法を用いて版画（prints）の複製性や即興性をコンセプチュアルに表現した作品を多く発表した

註3 読売新聞社（第4回展まで）／国際交流基金（第5回展以降）・東京国立近代美術館の共催により1957年から79年にかけて開催されたビエンナーレ（隔年）形式の国際版画展。

註4 版画の70年代参照

註5 1990年代以降に戦後の日本の版画の諸相や東京国際版画ビエンナーレについての検証を試みる特集や論考が現れ、今なお研究の対象となっている。参考：栗田秀法「戦後の国際版画展黎明期の二つの版画展と日本の版画家たち」『名古屋芸術大学研究紀要』第37巻、2016年、111～125頁

註6 今井治夫「我国の版画教育について」『金沢大学教育学部紀要・教育科学編』第36号、1987年、248頁

註7 同前 251頁

註8 湊七雄「小学校図画工作科における体系的な版画教材の研究開発—福井大学・福井県教育研究所の取組—」『福井大学初等教育研究』第1号、2015年、89～96頁

註9 2017年改訂の「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」における5領域「表現」のねらい及び内容

引用文献

- 1) 今井治夫「我国の版画教育について」『金沢大学教育学部紀要・教育科学編』第36号、1987年、251頁
- 2) 同前 252頁
- 3) 湊七雄「小学校図画工作科における体系的な版画教材の研究開発—福井大学・福井県教育研究所の取組—」『福井大学初等教育研究』第1号、2015年、92頁

図版典拠

図1 『「創作版画の誕生」展図録』渋谷区松濤美術館 編集・発行 1999年

図2 横浜美術館『富士ゼロックス版画コレクション×横浜美術館 複製技術と美術家たち—ピカソからウォーホルまで』有限会社東京パブリッシングハウス制作、印象社 編集・発行、2016年、160頁

図3 同前 168頁

図4～5 筆者（城山）作図

図6～12 短大教員による撮影

図13～14 筆者（鎌田、齋野）作成